

時言

長崎市でひとり出版社を営む旧知の西浩孝さんから久しぶりにメ

ールが届いた。東京の出版社を辞め、妻の勤務先がある長崎でこつこつと良質な本づくりに努めてきた編集者だ。今度はどんな本を出すのだろうか。文面を見て驚いた。

飛び込んできたのは「伊藤明彦の仕事1」の文字。伊藤明彦さん（1936〜2009年）は元長崎放送の記者だ。被爆者の証言を本格的に集めるため会社を辞め、断続的な深夜労働などで生計を立てながら全国を回って2千人に会い、千人以上の肉声を録音した。

筆者は90年、人生をかけて体験の聞き取りに情熱を燃やした伊藤さんの思いを聴き、被爆45年の企画記事の主人公として紹介した。ただ、亡くなってから長い時間が流れ、伊藤さんはほぼ忘れられた存在になっていた。

未来からの遺言

西さんは古書店で、名前も知らなかった伊藤さんの著書「未来からの遺言」を手にとって感動で心が震えたという。ある被爆者の体験だが、感銘と矛盾が同居するミステリーのような物語は、日本人の被爆体験を結晶化した「被爆民話」だ。伊藤さんは問いかける。被爆者は過去の記憶ではなく、未来のある情景を語っているのではないか。

西さんは、伊藤さんの全ての仕事を再び世に出すと決め、自らの出版社「編集室 水平線」から全6巻の第1巻としてこの本を復刊した。今後は「原子野のヨブ記」などを刊行する。これを「編集者人生でもっとも大きな仕事」と位置づけた。

24年、日本原水爆被害者団体協議会（被団協）がノーベル平和賞を受けた。被爆者の多くが旅立った中、体験を書き残し、知ってもらおうとした伊藤さん、西さんの志が時を超えて交わる。西さんは書いた。「伊藤明彦の仕事が輝きを放つのは、これからだ」